

麓の景色
きいろい地球

芹澤光治良



麓の景色
きいろい地球

芹澤光治良

新潮社版

麓の景色・きいろい地球

〈芹澤光治良作品集1〉

昭和49年3月15日 発行
昭和51年11月25日 2刷

定価 850 円

著 者 芹 澤 光 治 良

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社
会 社

〒162 東京都新宿区矢来町71
電話 業 務 部 (03) 266-5111
編 集 部 (03) 266-5411
振 替 東 京 4-808

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社員担にてお取替えいたします。

目次

麓の景色

5

きいろい地球

127

産れた土地

239

装
画
司
修

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

芹澤光治良作品集

第1卷

麓
の
景
色

第一章 母親はまだ見合などという

1

「安田さんの方、なんてお答えするつもりだね」

はつ子は出がけに、鏡台の前に坐っていると、母から前日の縁談について問われた。それ来たと自然に顔が硬張った。

「だって、今時、見合結婚なんかする人ないことよ」

「お見合って、こだわるけれど、安田さんはお父さんの旧友で、はつ子だって小さい頃、進太郎さんと遊んだじゃありませんか」

「覚えていないわ。幼稚園で遊んだなんてこと……おことわりしていただくわ」

お化粧もそこそこに、逃げ出すように急いで外套を着た。前日さんざん聞いた話だ。しかし、母は玄関までついて来て、靴をはいているのはつ子の頭に浴びせるような言い方をした。

「おことわりするのは簡単ですよ。だがねえ、考えてみま

したか。男一人に女二十人という時代ですからね。こんな勿体ないお話は、はつ子の一生にまたとあるまいと思えますよ。進太郎さんは東大出の秀才で、行く行くは教授になるだろうというのに、こちらは、なんのとさえもない貧乏な高校の先生の娘で——」

娘だと安心して、どこの母親も不用意に無礼な言葉を吐くものだ。娘の心を傷つけたことさえ気がつかない。はつ子は外に出て、空を仰いで深呼吸した。晩秋の風のない晴れた午後だった。

川沿いの道に出ていた。三間ばかりの川幅にすぎないが、珍しいことに秋らしく水がすんで、さらさら微かに音をたてて白く流れている。対岸の堤には、白い野菊が咲き、じゅう玉の実がむらがってみのっている。田舎で少女時代をすごした母が、野菊やじゅう玉の実などに興味があらうと、きのうも帰るなり、

「ねえ、お宮前の路で、じゅう玉の実を見たわ。流れの淵にたくさんたまって、そばに野菊も咲いているのよ。驚いたわ。今まで気がつかなかったけれど、淵だから小学生の目にとまらないで、とられなかったんでしょねえ」

と声はずませたが、母は硬い表情で会話のつて来なかった。

「ママもお宮の前を通ったら注意してごらんになるといい

わ」

「私は散歩なんかしている暇はありませんよ」

散歩ではなくて、野菜や魚を買いに出るにも、通らなければならぬ路だ。目あれど見ず、と西方の聖者は言ったが、お気の毒なママと、今朝もはつ子は口のなかで呟いた。

小川の水面すれすれに、背の黄色な小鳥が翔け去った。息をとめて眺めた。それだけでも、暗い心の重荷が吹きとんで、清々しい気持ちになる。

こんな風に、なにげないところに美を感じるのも、幼い日の母のしつけのおかげだ。その母が、近頃目にも心にも埃がたまつたようなのはどうしたことであろうか。

はつ子は音楽教室に漬いてからも、出掛けの母の剣幕が心に懸つてならなかった。

週に二回、井上先生の音楽教室で、先生の小さいお弟子のヴァイオリンの下見をするのが、はつ子の仕事である。しかし、同時に、家では練習することを両親が喜ばないから、殆ど毎日この荏原の先生の教室に来て、彼女自身も練習させてもらっている。小学生や幼稚園の児童のお弟子さんが、母親につれられて来る。みな小さいケースをさげて目を輝かせて嬉々としている。

はつ子も嘗て小学校の一年生の時、母につれられて、馬事公苑横のSS氏の門下生になった。戦争がはげしくなら

ない間、母は一時間以上もかかるところをつきそって行つて、母自身もヴァイオリンをおぼえて、家で練習するのは、母の方が熱心で、口やかましく指導した。天才教育といふことが、今日ほどやかましくなかったから、戦争に破れさえしなかったら、はつ子もずっと勉強をつづけて、一人前の演奏家になつたらうが、母もまた台所にくすぶつてしまわなかったかも知れない。

「先生、このキラキラ星のテンポ、幾度させても、坊やは狂つてしましますのよ」

五歳ばかりの坊やが可愛いヴァイオリンをひきはじめるのと、そばから茶の外套の母親が、そう話しかけた。幼児の稽古に全注意力を集中する表情である。目が輝いている。その母親ばかりではない。背後のベンチや椅子に順番を待つ子供の母親は、みな一様に真剣な顔をしている。母親の真剣な面持は美しいものだ。

かつてSS先生の処で、母もこんな美しい表情で、私の稽古を凝視したのであろうか。その輝いた母の表情を、今日のように希望のないものに変えたのは何か。戦争と敗戦後の生活苦であらうか。

はつ子は幼児の母親を見ると、この人々も同じ戦争に破れたのだらうかと疑いたくなる。みな生活にゆとりがあるらしく、生活のあかがない。はつ子の母は代稽古の仕事が

収入が少ないからといって、銀行に勤めるようにと、幾度もすすめた。他人の紙幣を一日中勘定することで、青春をよごすよりも、収入は少なくとも、小さい人々の才能の芽を育てる仕事の方が、有意義であると思うのだ。昔の母ならば、もちろんはつ子を理解して、喜ぶ筈であるが——

「さあ、坊ちゃん、よくおできでしたわ。勉強しましたね。今度はピアノで伴奏しますからよくあわせてひいて下さい」

はつ子はピアノに向った。いち、にい、さん、と声をあげて拍子をとって、ピアノを叩くと、幼児もちゃんとヴァイオリンで音をあわせて来る。幼児の横には、母親が立ち上って、わが子といっしょに一心に全身で拍子をとっているのである。はつ子はピアノに向っていても、母親の神経がビリビリ背なかに感じられる。はつ子が心をはずませていなければ、すぐに幼児のヴァイオリンの弓を持つ手がゆるんでしまう。それをまた、母親が神経質に感応するから、一刻も油断ができない。

「よくできました。えらかったわ——」

ピアノから振向いて、そう言うとき、幼児はぴょこんと頭を下げて、解放されたようにとび去ってしまう。母親も笑顔になる。はつ子は次の勉強についての注意をよく母親に話す。次の稽古日は、井上先生にみてもらうのであるから、

と母親は今から緊張しているが、はつ子とて、下稽古のよしあしが、試験されるようで、勉強して来て下さいよと、頼むような言い方になる。

こんな稽古を十人もつづけると、はつ子はくたびれて口もきけなくなりそうだ。母親達が音楽教室からつれだつて帰り、私鉄の停留所へ出るまでに、その日の稽古について話しあうにきまっている。子供のできのわるかったのは、先生が緊張していなかったせいにするにきまっている。

下稽古がすむと、たいていの場合、井上先生が上級の弟子の稽古をするのを見学して、最後にはつ子自身がレッスンを受ける。レッスン代を払わないのだから、下稽古の報酬が、母の言うように、やっと電車賃にすぎないにしても、はつ子は感謝している。特に、戦争中SS氏が信州に疎開する時紹介してくれてから、敗戦後の混乱期など、月謝なしでみてくれた先生だ。はつ子は恩返しのためだが、母は幾年勉強してもヴァイオリンでは食べて行けないと、前日も、縁談に色よい返事をしなかったからか、口ぎたなく愚痴っぽく言った。食べて行けないというより、才能がないことの方が、はつ子は悲しいのだが、才能がないからこそ、幾年しても、ものにならないというように、母はきめつけた。

この日は、しかし、井上先生はNHKに用事があって、

稽古は休みであった。

2

稽古が休みならば、練習をして帰るのが、はつ子のならわしだ。しかし、その日は練習する気力がなかった。

渋谷で下車せずに、そのまま新宿へ出てふと中央線に乗りかえ、中野の焼けあとへ廻ってしまった。電車の窓から、富士山がくっきり地平線に見えた。秋の雲が仄かにやけて、富士山は頂に雪をかぶっている。かつて馬事公苑横のSS氏の教室の帰りに、同じ富士山と雲のやけるのを見たことがある。その時に母がやさしく話しかけた言葉が、はつ子の胸のなかに今も鳴っているように思い出す。

「綺麗な雲でしょう。人間は時々空を見ないといけませんね。そら富士山も見えるでしょう。お母さんのお国は富士山の麓ですよ。小学校の運動場から真向いに富士山が見えてね」

まだ小学校にあがったばかりで、母の言おうとするところをくむことはできなかったが、やさしい声が胸にしみて、何か重大なことを話しかけられたように身がしまった。同時に、子供心に、いい母だと、わけもなく仰ぐような気持ちになった。人間は時々空を見るものですよと、その後、は

つ子はよく自分に言っては実行した。しかし、母は実行しているであらうか。

中野でおりて、戦前住んでいた方に歩いたが、すっかり寝ってしまった。殆ど本建築になったが、見覚えのある家の名がない。古風な構えの大運送店のあとに、バラックの運送店がある。たしかに以前の副隣組長の名札が出ているあの頃、はつ子の家でも疎開荷物を出そうとしたが、酒か洋服地をやらなければ、取扱ってくれないという噂であった。父は学徒動員の工場へ監督に行つて留守で、はつ子が母を手伝つて柳行李に衣類をつめて、やっと二人でこの店まで運んだことがある。東京に空襲がはじまつた頃の日曜日であった。軒下にも庭にも持ちこまれた疎開荷物がいっぱいつまっていた。

「岸田さんの策造ちゃんが中学に入学できたのは、うちのお父さんのおかげですよ。まさか酒を持って来ないからって、ことわりもできないだろう」

そう、母は氣負っていたが、実際、積み重ねた荷物のおかげで、主人が若い番頭に言うのを、はつ子はちゃんと耳にした。

「困ったなあ、だが、石丸先生の処では、ことわりもできないぞ」

その時、はつ子は女学校に入学したばかりであった。僅

かに一行季をやつと母の故郷へ送つたのだが、肩の荷をおろしたように安心したが、運送屋から出て、ポストの横の坂にかかると、大型トラックが停車していた。

藤川海軍大佐の家から、さまざまな家具や荷物をトラックへ運びこんでいた。ピアノも運びこまれてあつた。弱音をかけてヴァイオリンの練習をしても、国賊だと防空団員から怒鳴られるのに、海軍大佐の家ではピアノを選び出していいのだろうか。一個の行李さえ、一般人は疎開もむずかしいのにと、はつ子はぽかんと眺めていた。

「藤川大佐の家が疎開するところをみると、いよいよこの辺も危険かな」

米の配給所の男がそう言いながら、自転車を走らせて行った。海軍大佐ともなれば、家庭のなかに、如何にたくさんの特物があるものかと、ほとほと感心して、トラックに積まれる荷物にはつ子はみとれたものだ。

「はつ子ちゃん、どうしたの」

林和夫が真新しい白線帽で、微笑していた。

「帝国海軍も家族を避難させるのか、戦争もますます大変になったんだな」

「林さん、お目出度う」

「はつ子ちゃんだって、A学院に入学できてよかったね。もう工場動員？ 僕たちは授業なしで、神奈川県の工場へ

配置さ」

林和夫は待望の一高生になって大人びた口のきき方をした。

「ねえ、この辺も空襲されるかしら」

「勿論されるさ。もう青少年防空隊じゃまにあわないね」

「こわいわ——」

「僕達男はやがて出征して戦死するかも知れないけれど、はつ子ちゃんなんか、生きてなければ——」

「林さんが戦死するなんて、いや、一高にはいったばかりじゃないの」

「敵機が毎日本土に襲来するようになったから、いつでも出征して戦死する覚悟さ」

「私だって工場動員するから、爆死することもあるかも知れないわ。そう先生が言ってたわ」

「はつ子ちゃん、ヴァイオリンやめちゃった？」

「非国民って言われるし、ヴァイオリンどころじゃないわ」

「やめてはいいなあ」

「弱音器をして戸棚のなかで練習したけれど、母もそんな暇があつたら、寝た方がいいと言ふの。休める時に休んでおけて——」

「そうだが、戦争がおわつた時のことも考えて生きなければいけないよ」

「戦争おわるかしら——」

「おわるよ、いつか……永遠に戦争はつづかないよ。はつ子ちゃんなんか、アメリカやイギリスの少女とヴァイオリンで戦争しているつもりで勉強したらいいんだ」

「SS先生も、井上先生もそう仰（お）しちゃったわ」

「それならヴァイオリンをやめないで、ね。約束する？」

「ええ」

「もう、夕焼がきれいだな。こんな美しい空の下で空襲を怖（おそ）れて生きるなんて、人間は悲しいなあ」

林は夕焼に顔をそめていた。二十年の四月初めであった。その夕も風がなくて空が焼けていた。その二、三年前に、退役陸軍少佐の町会長が、町会内の四年以上の小学生から大学生まで男女全学生を集めて、青少年防空隊をつくった。大学生が隊長になって、週に三回も防空演習をした。同じ町会に住みながら、顔をあわせても挨拶するのも遠慮した若い人々が、急に相互扶助の精神で結ばれて、仲よしになった。大学生や高校生は次々に出陣し、小学生は強制疎開などあって、青少年防空隊も隊員が次第にへって、二十年の春には自然消滅したが、はつ子には、たのしい思い出を残した。特に、和夫は音楽に興味があって、いつの演習にもはつ子を庇護（ひご）して休憩時には泰西の音楽家の評伝を話してくれたものだった。

林さんは何処へ行ったのであろうか。はつ子は久振りに林和夫をなつかしく思った。

藤川大佐の屋敷のあとには、知らない人が二階屋を建てた。坂路を登ると、林の家跡に出た。その辺は大きな鉄筋アパートが建つらしく工事中である。はつ子は暫くたずんでいた。夕焼の美しかった春の夕に、はつ子は和夫とここで別れた。それ以来会ったことがない。あれから一月半もして、この一帯は一夜の空襲にやけて、住民はてんでんばらばらに散ってしまった。借家住いが多かったからであろうか。はつ子は翌日弟や妹と母につれられて母の故郷におちのびた。富士山の麓と母は言ったが、富士山の見える海岸の漁村で、みじめに三カ月過してから、日本が降伏して父が迎えに来て、世田谷区（せただやぐ）の今の借家にもどった。

上京して数日後、妹と弟と三人で焼けあとへ来てみたが、一望の焼野原で、記憶をよぶものは門柱だけであった。その時も、林の家の前に立ったが、立退先もしるしでなかった。神奈川県（しずおか）の工場に配置された筈（はず）の林和夫は、恐らく敗戦で無事に家へ帰ったろうが、何処にいたのであろうか。そう、はつ子は焼野に立って考えたが、あれから八、九年ぶりに再び此処（こゝ）に来て独りぼんやり、建ちかかった大建築を見上げながら、同じことをまた考えるのだった。

その坂路をのぼり切ると、商店街に出るが、商店街に出

る直前の小徑を左にはいると、はつ子達の住んでいた場所である。そこには木造のアパートが建っていた。辺りを歩いて商店街に出て、誰か知人に会ったらと期待したが、その商店街も焼けたあとに新しくできて、顔見知りには誰も会わなかった。

失望して引き上げたが、はつ子は何故失望するのか反省してみた。知人に会ったら、林の消息がわかるかも知れないと、空頼みをして来た自己に気がついて、われながら顔を赤くした――

3

家にもどった時には、とうに夕食もすんだのか、弟や妹達はもう茶の間にいなかった。夕刊をひろげた父のそばに母が編物をしていた。お膳の上には、はつ子の夕食に、さんなまが焼いてのせてあった。両親の重苦しい気配に、上の弟や妹はすばやく二階へ、下の弟達は四畳へひっこんだのであろう。はつ子は重い心で筆をとったが、待ち構えたように、父は夕刊をたたみながら言った。

「はつ子は、安田さんにおことわりするって？」

父の持ってきた縁談だった。進太郎の父の安田氏は、父の高校時代の親友であるが、はつ子の父が最後まで教育者

に甘んじて新制高校の教師をしているのに反して、戦争中に教職をはなれ、軍需工場の練成部長に就職して、敗戦後もひきつづきその工場にのこり、今や重要な地位にあるという。生活も富裕で、進太郎はアルバイトの苦勞もなく東大の工学部を卒業して、そのまま研究室に残り、将来を嘱望されているという。安田家では、長男の嫁であるから、旧友の教育家の娘ならば安心であるから、見合をさせたいという申し出だという。教室では個人の自由を説き、結婚とは愛する二人が独立して新しい家庭を建設することだと言った父も、わが娘の場合には、家同士の結婚が伝統的で美しいといい、良縁であるといつて有頂天のようだ。

「おことわりするものなにも、私、進太郎さんを知りませんもの」

「今朝おことわりして下さいと、あんなに言ってたじゃないかね」

と、母は涙声だ。両親の間では、さんざん話しあった証拠である。

「ママがあんまり仰しやるから、おことわりしていただくより他になかったんですけれど」

「やだねえ、一体どうするつもりさ」

「ママはこんな良縁はないと、感激してるんですもの、私の考えもきいて下さらないし、第一進太郎さんがどんな人

かもわかんないし……進太郎さんだって同様に困ってるんじゃないかしら」

「先方でもらいたいというんですもの、進太郎さんが困ってる筈はありませんよ」

「安田さんだって進太郎さんのお気持ちを存じないのよ、きつと……ママが私がわかんないように」

「だから、安田さんは見合させたいと言うのだよ」

と、父がおしかぶせた。煙草に火をつけたが、不機嫌な時の癖で、煙を天井の方へ吐いている。

「お見合って、近頃の若い人、みんな軽蔑けいべつしてることよ。

進太郎さんに軽蔑されますわ」

「見合って言ったって、幾年ぶりに将棋をさそうかってことだから……重苦しく考えていい」

「それはパパの方でしょう？ 進太郎さんと私はやっぱりお見合するってことでしょう？」

「はつ子は先方でお気に召すか見ていただくだけです。

えらそうに言ったって、今日までそんなに仰しゃっていただいたことがありませんか」

母の言葉は氣にとめないで、父を相手にしなければ解決できないと、はつ子は箸をおいた。

「パパは日曜日って、お約束なすったの。私は大袈裟おおげさにお見合なんて、とても自信がありません……パパと尤もともらし

い顔で安田さんに伺って、お客様の様に坐らせられたら大変ですから、進太郎さんと何処かで落合って、映画でも見た方がいいと思いますけれど」

「だって、お前、そんな勝手な——」と、母の声はふるえていた。

「問題は進太郎さんと私のお見合で……進太郎さんと私が愛しあえるかどうか、知る機会をつくるんでしょう。ねえパパ、安田さんにそう申込んで下さらない？」

「それも一案だがな」

「そんな非常識なことを申込めますか。私は反対ですね。第一先方に失礼ですよ。ほんとうにはつ子はわがままです」

「私は、ママに譲歩したつもりですけれど——」

母は怒ったように立つて行った。あとかたづけはするからと、はつ子は呼びかけたが、母は台所へ去って行った。後姿を目で追って、味気なく箸をとったが、早く食べ終わらなければ、怒鳴りつけられるにきまっている。人間は時空を見なければいけないと優しく言った母は、どこへ消えたらうか、不思議でならない。

はつ子が二階へ上ると、弟の一男がくすくす笑った。

「お姉さんはゆうずうがきかないんだなあ。お見合して、ことわれば事は簡単じゃないか」